

岐阜市立女子短期大学創立 70 周年よせて

学長 杉山寛行

2016 年、本学は創立 70 周年を迎えた。昭和 21 年の創立から現在に至る 70 年間の推移は、本号に付される年表などに譲るとして、この間の社会の枢軸的な価値観、とりわけ女性の社会的位置づけなどは、大きく変化してきた。大学への進学者数の著しい増減の波、大学の増加、学部、学科の多様化、一方で家庭の教育への財政的負担の増加などもあった。また近年では、社会のグローバル化や少子高齢化、またデジタル化の推進などによって、高等教育を巡る状況は、その変貌を余儀ないものとして迫ってきた。

こうしたことに対応しつつ、本学を今日あるかたちに発展させてきた源は、設置者である岐阜市、岐阜市市民の本学への期待と支持、この間に奉職された教職員の弛まぬ努力、何にもまして本学に学ばれた学生の皆さんの学びの成果と社会での活躍によるものであったであろう。

本学は、豊かな教養的素養を有する専門職業人の育成、教養教育と専門教育による知識基盤社会に対応することのできる人材の養成をめざしている。4 つに分かれた各学科によってその重点をいささか異にすることはいえ、いずれも専門教育による専門性、とりわけ専門における高度化した技術の修得と、豊かな教養を身につけることを 2 つの柱としている。今日ややもすれば声高にとなえられる「社会的需要」に応じる人材の養成のみが必ずしもめざされている訳ではない。社会や企業の要請といわれるものが、ともすれば有用とされる技術に偏り、スキル養成型の教育を意味しがちであるからだ。要請されている技術の修得は当然のこととして、同時にそれを要請する社会の価値観、目的を深く理解し、ある場合には批判的にもそれを受け止め、社会の価値に対する考え方それ自体をつくりあげてゆくことのできる人材の育成こそ重んじられるべきだ。

現代社会に対し、積極的、能動的な自立した市民として活動することのできる人材の育成こそが急務であろう。

近年、コンピテンス／活用能力ということが主張されている。「何を知っているか」では充分ではなく「何ができるか」が重要だということであろう。知識や技術が充分に活用できることは確かに重要なことではある。しかしそれらが無目的・無批判・無自覚に発揮されるのではまた意味がない。

70 年の歴史は、組織としては成熟期に入ったといえることができよう。高等教育を巡る状況の中でも、公立短期大学を巡る状況は特に差し迫った、複雑な課題が山積している。こうした課題に真摯に取り組みながら、新しい段階への一步を踏み出したいと思っている。